

二週間の教育実習を終えてみて、学校教育において重要なことはいくつか考えられるのだが、最も重要だと感じるのは生徒理解である。もちろん実習に行く前でも、生徒理解が大事であることは様々な講義で学んできたことであつたが、実際に実習に行ってみると「そういう生徒理解も大事なんだ」と新たに気づかされる点が多く、またしっかり生徒のことを分かっていなかったために授業が上手くいかないことがあつたからである。それらのことを踏まえ、実習中の出来事を挙げながら詳しく述べる。

生徒理解について、まず実際に授業をするにあたって大切だと感じたのが「生徒観」である。これまで何度も学習指導案を作る際に生徒観を書いてきたが、その授業を本当にするわけではなくそこまで意識せずに、自分が学習指導案を書きやすいような生徒観にしてしまっていた。しかし高校生を目の前にして授業をすると、クラスが違えば授業の雰囲気も全く変わり、それぞれのクラスごとに発問の仕方などを変えないと上手くいかない、つまりしっかりと「生徒観」を踏まえないといけないということを身をもって実感させられた。

授業では更に、その授業が何時間目にあるのか、その日にどんな行事が控えているのかを把握した上で、生徒の状態がどうであるのかを分かっていないといけないと指導教諭に教えられた。私がこのような指導を受けたのは言うまでもなく、これらのことを踏まえずに授業を行って失敗したからである。

実習中は現代文を4クラス、古文を2クラス担当していた。私が失敗してしまったのは現代文の授業であつたが、4クラス担当のため、同じ範囲の授業を計4回行うことになる。初めは学習指導案通りに進め、2回目は指導教諭からの指導を踏まえ、初回で上手くいかなかったところを直して、といった感じで授業を行っていた。そして失敗したのは3回目の授業だつた。

その授業は1時間目で、来校していた留学生が加わり、一緒に受けているという普段と少し違う状態であつた。授業の中で、留学生たちも参加できるようにした方がいいのだろうかと思つたが、彼らの日本語の習熟度が分からなかったため、1、2回目と同じ進め方で授業を行った。すると、先に行った2クラスに比べて極端に生徒の発言が少なく、私が一人焦って空回りしている感じになってしまった。要するに、3回目ということで発問や展開の仕方がかなり固まっていたので、生徒の様子を考えずそれに倣うことに固執してしまつたのである。

授業後の指導教諭との振り返りの際に、生徒たちは留学生がいたから日本語で盛り上がることを遠慮していたこと、1時間目でまだ授業を受ける態勢に切り替わっていない生徒もいること、またその日は午後から英語のスピーチコンテストが行われる予定であり、それに出場する生徒が数名いて緊張していたことなどを言われた。大学で学習指導案を考えているときや模擬授業をしたときなど、内容をどのようにして教えるのかという点ばかりに気をとられ、その授業が何時間目にあるか、そして生徒の状態がどうであるのかなど気にとめたこともなかつた。実習でのこの失敗は実際に生徒を目の前にしないと分からなかったことであり、私にとって大きな学びとなつた。

次に、生徒のことをただ理解するだけでなく、生徒にも私のことを分かってもらわないといけないことを強く実感した。教壇実習をし始めた当初に悩んだことの1つが、指導教諭が行う授業に比べて私が行う授業では生徒の発言が少ないということだつた。もちろん1年以上かけて生徒との関係を作つてこ

られた指導教諭と、数日しか経っていない自分を比べるのはおかしいのかもしれないが、それでももっと生徒に発言してもらいたくて、どうすればいいのか悩んだ。

その際指導教諭から言われたことは、生徒の顔をしっかり見ていないということ、そして生徒は私の顔をよく見ているということであった。私自身、生徒の顔をしっかり見て話していたつもりであったのだが、指摘されてみると、なんとなく生徒の方に視線をやっただけで、一人ひとりの顔をしっかりと見られていなかったことに気がついた。その指摘を受けてから、説明や発問した後には生徒の顔をしっかりと見るようにすると、たくさんの生徒が私の話を聞いて頷いてくれていたことが分かり、生徒からの反応が薄いと思っていたのは私が生徒の顔を見ていなかったからなのだと実感した。また、生徒も私の顔をよく見ていると言われたことから、授業の始めに、私が在学していた頃の話や自分のことを話すようにしたところ、生徒からの発言が増えるようになった。それは、少しでも私のことを生徒が知ってくれたことと、堅苦しく授業を始めるのではなく、そういった話から入ることで授業の最初に生徒が発言しやすい雰囲気を作れたからであると感じる。

教育実習を通して、様々な角度からの生徒理解の大切さを学ぶことができ、また教師と生徒の信頼関係は、教師が一方向的に生徒のことを理解するのではなく、生徒からも理解してもらわなければいけないことを改めて実感した。この実習で得たことを生かし、また教壇に立って生徒と関わりたい。